



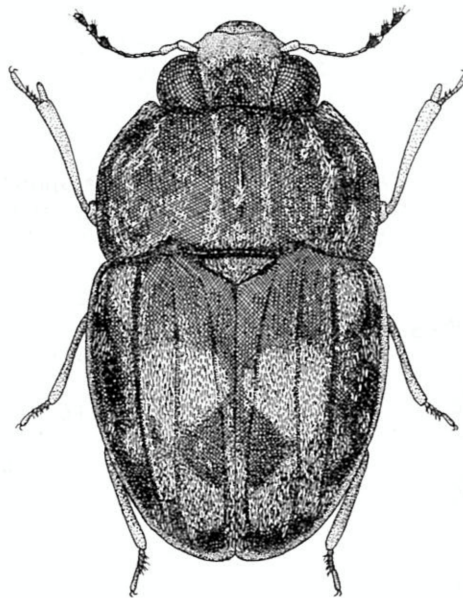
日本産ミジンクスイムシ科概説

佐々治 寛之

はじめに 体長1~2mmの小さな甲虫で、日本から4種だけが記録されているにすぎない、目立たない科である。独立の科として認められたのが1955年で、日本から最初に発見されたのが1964年であるから、一般にあまり知られていない。北隆館の原色大図鑑にはその名すら出ておらず、和文で書かれたものとしては、中根(1972)のわずか2行の紹介があるにすぎないので、ここに解説を試みる次第である。ミジンクスイムシ科 Propalticidae の模式属 *Propalticus* SHARP, 1879 が記載されたのは、ちょうど今から100年前、コキノコムシ科 Mycetophagidae の一員としてであった。その後、もう一つの属 *Discogenia* KOLBE, 1898 は現在のミジンコムシモドキ科 Discolomidae (当時はホソカタムシ科の1亜科)のものとして記載された。これらはクスイムシ科、テントウダマシ科など、科の所属を転々と変えながら、結局、1955年、CROWSON の名著, "The natural classification of the families of Coleoptera" の中で新しい独立の科 Propalticidae が創設された。そして、5年後、JOHN (1960) は、この科の全既知種を整理してまとめ、また、CROWSON & SEN GUPTA (1969) は分類学的位置について検討した。現在、2属43種が知られている。一方、日本の種については、1964年、神谷(=佐々治)が初めて八重山群島から2新種を記載したのに始まり、中根(1966)

が木曾駒ノ湯から、佐々治(1971)が四国面河溪からそれぞれ1新種を追加し、都合4種となった。科の特徴と分類学的位置 一般に幅広い楕円形で扁平。背面は短毛や鱗片で被われ、多くは複雑な毛斑を形成する。頭部は横長で、通常大きな眼を有する。触角は10又は11節で細長く、先端3節は太く、球桿部を形成し、その末端節を除く2節は先半分は著しく細くなる。前背板は大きく、半円形、又は側縁が丸く前方に狭くなる台形。小楯板は著しく横長で、かなり大きい。上翅は縦隆線を有する。前基節は横に細長く、互いに幅広く離れ、前基節窩は後方に開く。中基節窩は中・後胸腹板によって側方に閉じられる。跗節は雌雄とも5-5-5で単純、顕著な広がりはない。前脛節端に1本の大形の刺がある。中・後脛節にはそのような刺は認められない。腹部は外観上、5節からなり、各節は可動的に接続する。

北隆館の原色大図鑑(II)の検索表に組入れるとすると、15頁の20(25)と21(22)の間に、次のように挿入するとよい。



第1図 マダラミジンクスイ *Propalticus morimotii* 20' (20'') 前脛節端に1本の大きな刺がある。  
H. KAMIYA

ミジンクスイムシ科 Propalticidae  
20' (20'') 前脛節端には2本の刺がある。

一見したところ、コキノコムシ科の *Litargus* に似た感じであるが、跗節の節数を数えれば容易に区別できる。前基節が互いに広く隔たること、前脛節

端に顕著な刺があることはいい識別点になる。

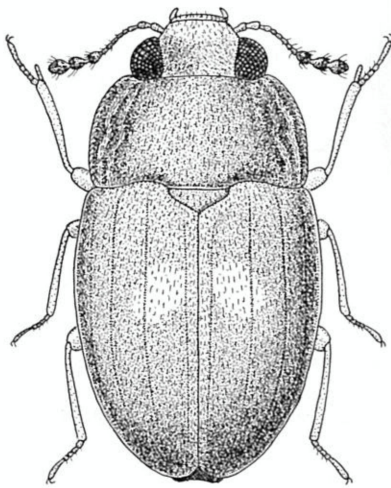
ところで、分類学的位置については、はじめに触れたように、なかなか定めにくい、ヒラタムシ上科 Cucujoidea の球角群 Clavicornia に入ることは確かのように、CROWSON & SEN GUPTA (1969) はコメツキモドキ科 Languriidae の原始的な群、例えば Cryptophilinae 亜科に類縁をもっていると推定しながらも、カクホソカタムシ科群との関連も考えられるとしている。もともと、ヒラタムシ上科には、系統上の位置が明確でない小さな科がいくつもあって論議を呼ぶことが多いが、この科もその一つであろう。

既知種とその分布 本科に所属する甲虫には2属あり、JOHN (1960)、CROWSON & SEN GUPTA (1969) を参考にすると次のように分けられるようである。

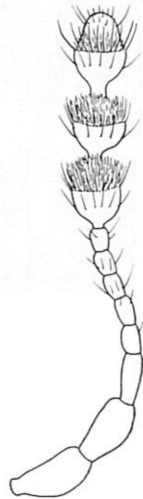
1(2) 各上翅には3~4本の隆条がある。前脛節端の刺は非常に大きくへら状。触角は頭部の背面につく。体形はやや幅狭く、体幅は体長の $\frac{1}{2}$ くらい………*Propalticus* SHARP, 1879 (= *Microloma* JOHN)

2(1) 各上翅には5本以上の隆条がある。前脛節の刺はやや小さく、尖っている。触角は眼の前方につく。体形は幅の広い楕円形で、体幅は体長の $\frac{2}{3}$ くらい………*Discogenia* KOLBE, 1897

***Discogenia* 属** この属は KOLBE が Usambara 産の新種記載に際してホソカタムシ科の *Discolomi* nae 亜科 (現在のミジンムシダマン科) の1属として作ったもので、JOHN (1940, 1942) はそのミジンムシダマン科所属を認め、7種を追加した。しかし、同氏 (1956) はこれはミジンムシダマン科ではないとして、テントウダマン科に移し、また1種を追加した。さらに、1960年、*Propalticidae* をまとめるに際して、本科に入れ、2新種を加えた。全部で11



第2図 キウチミジンキスイ *Propalticus kiuchii* SASAJI



種が記載されていることになるが、ことごとく熱帯アフリカ産で、マダガスカル島にもセーシェル群島にも分布しないことは興味深い。CROWSON & SEN GUPTA はこのことから Oligocene 以降に分化した属であろうと推定している。我が国から発見される可能性はまずないだろう。

***Propalticus* 属** 1879年、新属新種 *Propalticus oculatus* SHARP がハワイ、サモア、ミクロネシアから記載されて以来、現在まで32種が知られており、その分布範囲とそれぞれの地域の種数をあげると次のようである。

熱帯アフリカ(4)、マダガスカル(1)、セーシェル(1)、インド(1)、セイロン(1)、マレー半島(2)、インドネシア(5)、ニューギニア(3)、オーストラリア(2)、ニューカレドニア(1)、サモア(1)、ハワイ(1)、ミクロネシア(7)、トンキン(3)、琉球(2)、日本内地(2)。

旧世界の温暖地域に広く分布していることになる。微小な虫であるにもかかわらず、各地で発見されていることは、熱帯では必ずしも珍稀なものではないのかもしれない。冬には相当の降雪のある福井県の山地や木曾駒ですら見つかったので、実際にはかなり北まで分布していると思われる。今までに判明しているかぎり、採集場所は朽枯木の樹皮下で、扁平な体形はそのことを裏付けている。また、大きな前脛節端の刺や、よく発達した前胸から、ピョンとはねる習性が推測され、実際の観察報告もあり、大形の筋肉が前胸に付着していると考えられる構造もみられるという。ナガクチキ、ハナノミ、トビハムシ、ノミゾウムシなど後肢ではねる甲虫は少なくないが、前肢ではねる姿をみたいものである。

**日本産 *Propalticus* 属 4種の検索表**

- 1(2) 前背板には側縁に沿って2対の縦溝があるが、顕著な白色毛列はない。体長2.2mm………*japonicus* NAKANE
- 2(1) 前背板には側縁に沿った縦溝はないが、顕著な白色毛列がある。
- 3(6) 前背板の側縁に沿った白色毛列は3対で比較的単調。上翅斑紋は単純。
- 4(5) 上翅は黒褐色地に、中央前に1対の不明瞭な円形淡色紋がある。体長1.8—2.2mm………*kiuchii* SASAJI
- 5(4) 上翅の周縁部は広く黒色で、その内側は中央の黒色紋を囲み淡色。体長1.3—1.7mm………*ryukyuensis* KAMIYA
- 6(3) 前背板の白色毛列は複雑。上翅の斑紋も複雑なまだら状。体長1.6mm………*morimotoi* KAMIYA

**1. ヤマトミジンキスイ *Propalticus japonicus* NAKANE, 1966**

芝田太一氏採集の木曾駒ノ湯産1♂によって記載されたもので、その後の採集記録を知らない。地色は暗褐色で、頭部



前方, 触角, 前胸・上翅の側縁部, 上翅基部, 上翅中央前に1対の斑紋が淡色。前背板側縁に沿って2条の溝があるのが特徴である。

2. キウチミジンキスイ *Propalticus kiuchii* SASAJI, 1971 (第2図)

木内盛郷氏によって筆者にゆだねられた, 同氏並びに酒井雅博氏採集の四国面河溪産の2頭の標本に基いて記載されたもので, その後, 福井県今庄町夜叉ヶ池でも採集された。上翅の淡色紋は前種にやや似ているが, 前背板に顕著は白色毛条が3対ある。恐らく, かなり広く分布しているのではあるが, 上記以外のものを見ていない。

3. スジメネミジンキスイ *Propalticus ryukyensis* H. KAMIYA, 1964 (第3図)

次種とともに日米科学協力研究による琉球列島昆虫相調査によって得られたもので, 西表島・石垣島産の18頭に基いて記載された。前背板の白色被毛列は前種に似ているが, 上翅淡色斑は, 中央暗色部を囲む環状である。その後の採集品を見ていないが, 近年八重山群島に採集に行く人も多いので多分採れていると思っている。

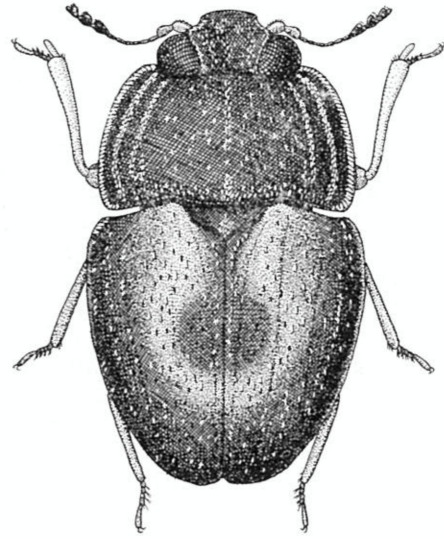
4. マダラミジンキスイ *Propalticus morimotoi* H. KAMIYA, 1964 (第1図)

西表島で森本 桂博士が採った1♀に基づく。図にみるように, 前背板には白色被毛による特有の様相があり, 他種とは容易に見分けが付き, また上翅の斑紋も特徴的である。その後の追加記録をみない。蛇足ながら, 前種と本種を採集した森本博士は, この小さな甲虫に一早く注目され, 「こんな虫がとれたよ」と略図入りの書簡で知らせてくれた。博士の慧眼と御好意に感謝の意を表して, 種名を奉獻させていただいた。

付記 何分にも微小な甲虫なので, 眼につきにくいですが, 本邦, 特に琉球列島, や台湾から新しい種の追加も予想されるので, 諸賢の注意をうながしておきたい。

主要参考文献

- CROWSON, R. A. 1955. *The Natural Classification of the Families of Coleoptera*. London.  
 CROWSON, R. A. & T. SEN GUPTA 1969. The systematic position of Propalticidae and of *Carinophloeus* LEFKOVITCH (Coleoptera, Clavicornia) with description of a new species of *Propalticus* and of its supposed larva. *Proc. R. ent. Soc. Lond. (B)*, 38: 132-140.  
 JOHN, H. 1960. Eine übersicht über die Familie Propalticidae (Col.). *Pacif. Ins.* 2: 149-170.  
 KAMIYA, H. 1964. Discovery of the family Propalticidae in the Ryukyus (Coleoptera, Cucujoidea-Clavicornia). *Kontyu*, 32: 281-285.  
 NAKANE, T. 1966. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions, XXIV. *Fragm. Coleop.*, (16): 64-67.



第3図 スジメネミジンキスイ *Propalticus ryukyensis* H. KAMIYA

SASAJI, H. 1971. A new *Propalticus*-species of Japan (Coleoptera: Propalticidae). *Kontyu*, 39: 37-38.

SASAJI, H. 1977. Check-list of Coleoptera of Japan, No. 12. Family Propalticidae.

SEN GUPTA, T. 1978. Discovery of the family Propalticidae (Coleoptera) from India, with description of a new species of *Propalticus*. *Orient. Ins.*, 12: 81-83.

古い文献については JOHN (1960) に網羅されているので省略。(福井大学教育学部)

○コガタルリハムシの食草

コガタルリハムシ *Gastrophysa atrocyanea* MOTSCHULSKY. 1860 は別名ギンギンハムシの示す通りギンギンに群がる普通種であるが, 他の加害植物を私は知らない。ところが, 今年(1979)6月24日山形県大石田市の最上川畔の河原で水の引いた後の泥地に生えたハルタデの若草に本種が群って食べているのを発見した。付近にギンギンはあったが全く食痕はなかった。従って, ギンギンを食い尽くして仕方なく同じタデ科のハルタデに移ったものではない。被害はかなり広範囲に及んでいるように見受けられた。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○ヒメミズギワトキリゴミムシ利尻島の記録

ヒメミズギワトキリゴミムシ *Demetrias amurensis* MOTSCHULSKY については, 本邦では北海道よりわずかな記録があるにすぎず, 島嶼の記録はいまだないかと思われる。筆者の手許には, 利尻島産の標本があるので報告しておきたい。

2頭, 利尻島沼浦, 11. vii, 1977, 直海俊一郎採集。貴重な標本を恵与された直海俊一郎氏に心からお礼申しあげる。(佐賀県伊万里市, 大石美也子)

## 日本産カンショコガネ属概説(2)

小林裕和

3. リュウキュウカンショコガネ *Apogonia bicavata* ARROW

腹面は黒色～黒褐色で光沢がある。背面は腹面と同色の事が多いが、時として、翅鞘は赤味を帯びる。腿節は赤褐色。触角は黄褐色。頭楯は比較的大きな点刻を密に具える。前頭および頭頂は細点刻を密に具える。前胸背は、一部で融合した細点刻を密に具える(若干の個体ではサメはだ状を呈し、光沢が鈍い)。前縁は幅広く縁付けられる。側縁は中央より後方で強く円味を帯び、前縁角および後縁角付近では平圧される。前縁角は鈍く突出し、後縁角はやや角ばる。小楯板は平坦であらう点刻される。翅鞘の点刻は強く密で、特に中央部付近の点刻は融合する。中央には目立つ幅広い1条の条溝と、その外側に狭いかすかな1条を有する。尾節板は、後方でやや中高となり、非常に強く、密に点刻されるが、しわ状とならない。前脛節は細く、2外歯を有する。体長：8～10 mm。分布：沖縄本島，中之島。

4. チョウセンカンショコガネ *Apogonia cupreoviridis* KOLBE

基亜種は朝鮮，済州島，満州などに産する。わが国からの記録としては LEWIS の五島列島よりの報告があるのみであり、それ以外では採集の記録はない。琉球列島には、次の亜種が分布している。

subsp. *miyakoana* NOMURA (ミヤコカンショコガネ)

長円形，黒色で光沢があり，個体によっては赤褐色またはかすかな緑色光沢を帯びる。体型並びに各部の形態は *A. bicarinata* (フタスジカンショコガネ) に非常に良く似ているが，頭楯前縁はより強く弧状となる。腹節の側縁には縦の隆起線を有しない。前脛節は通常2外歯で，個体によっては痕跡的な第3歯を有する。などの諸点で区別することができる。体長：9.5～11.5 mm。分布：宮古島。

本亜種は，現在のところ宮古島からのみ知られ，近似種の *A. bicarinata* が九州本土から沖縄本島を経て石垣島，西表島までに分布しているが宮古島には産せず，朝鮮などに産する本種が隔絶された同島にだけ分布している事は興味深い。

5. イシハラカンショコガネ *Apogonia ishiharai* SAWADA

本種は，四国および屋久島，トカラ諸島などに分布しているが，地域により以下のような2つの亜種に区別される。

a. subsp. *ishiharai* SAWADA (イシハラカンショコガネ)

体は卵円形に近く，腹面および腿節は赤褐色で光沢がある。脛節および跗節は暗褐色。翅鞘は赤褐色で個体により，やや紫色の光沢を帯びる。前胸背は

黒褐色で光沢がにぶい。頭楯は短く幅広く，比較的大きな点刻を非常に密に具える。前縁は中央で弱くわん入する。頭部は密に点刻され，前頭中央は縦にやや凹む。前胸背は縦長の点刻をシワ状に密に具える。側縁は強く弧状を呈し，後縁近くで最も幅広い。前縁角付近では幅広く，後縁角では狭い平圧部を有する。前縁角は鈍く突出する。後縁角は，なだらかに円い。小楯板は平坦でほとんど点刻されない。翅鞘は小点刻をやや密に具え，あまり目立たない2条の条溝を有する。尾節板は密に点刻される。前脛節は鈍い2外歯を有する。体長：10.5～11.5 mm。分布：四国。

b. subsp. *yakushimana* NOMURA (ヤクシマカンショコガネ)

基亜種に比べ，腹面は暗色。翅鞘はほとんど黒色で光沢が強い。前胸背は基亜種と同様縦長点刻をシワ状に密に具えるが，点刻はやや浅く細かい。中央にはかすかな縦線を具える個体が多い。側縁は前縁角付近で特に平圧されるが後縁角付近では，ほとんど平圧されない。前縁角は基亜種に比べ大きく，やや鈍く突出する。体長：10.5～11 mm。分布：屋久島，中之島，悪石島。

6. カミヤカンショコガネ *Apogonia kamiyai* SAWADA

腹面は黒色～赤褐色で光沢がある。背面は一樣に黒色，あるいは翅鞘が暗褐色で前胸背は黒褐色でにぶい光沢を有する。各肢は黒褐色。触角は黄褐色。頭楯は幅広く弧状で前縁は中央でわん入する。点刻は比較的大きく強く密。頭部は密に点刻される。前胸背は，かなり密に密に点刻される。前縁は狭く縁付けられ，中央部にはまばらな微毛列を有する。側縁は中央よりやや後方で最も幅広く，後方ではかなり円味を帯びる。前縁角付近は，わずかな平圧部を有するが後方では平圧されない。前縁角はわずかに鈍く突出するが，後縁角はやや角ばる。小楯板は平坦でまばらに点刻される。翅鞘は側縁では比較的大きな，会合部付近ではやや細かな点刻を具える。中央にはかなり目立つ幅広い1条の条溝とその外側に狭い1条を有する。尾節板は中高となり，かなり大きな点刻を有する。前脛節は明瞭な3外歯を有する。体長：9～11 mm。分布：宮古島，石垣島，与那国島；台湾。

7. オオカンショコガネ *Apogonia major* WATERHOUSE

体色は黒色でかなり強い光沢がある。個体によっては背面に，わずかな金属緑色光沢を帯びるものがある。頭楯は短く，幅広く密に点刻される。前縁は中央部で弱くわん入する。前胸背は細点刻をややあらく具える。前縁中央付近では2つのかすかな凹陷



部を有する。中央は個体により点刻を欠く縦線を有する。側縁はなだらかに円味を帯び、中央より後方で最も幅が広い。前縁角付近では、やや平圧される部分を有する。前縁角は鈍く突出する。後縁角はやや角ばる。小楯板は平坦でほとんど点刻されない。翅鞘は比較的大きく一部で融合した点刻を、やや密に具える。中央にある2条の条溝はやや幅広く、会合部の1条とあわせて平滑である。尾節板は中央部が中高となり、密に点刻される。前脛節は2外歯を有する。体長：11~12 mm。分布：九州。

8. シブヤカンショコガネ *Apogonia shibuyai* SAWADA

体色は茶褐色で光沢が強い。頭部および前胸背では一部暗色となる。頭楯は幅広く、前縁は中央でかすかにわん入する。点刻は密で側縁付近でしわ状となる。頭部は密に強く点刻されるがしわ状とならない。前胸背は、比較的密に点刻される。前縁は幅広く縁付けられる。側縁は後縁角前方で最も幅広く、前方に向かってなだらかに狭まる。前縁角付近では幅広い明らかな、後縁角付近はかすかな平圧部を有する。前縁角は大きく突出するが先端は鋭くない。後縁角はなだらかに円い。小楯板は平坦で側方はま

ばらに点刻される。翅鞘の点刻は細かく比較的まばらであるが側縁前方では一部融合し、やや密となる。会合部および中央とその外側に点刻を欠くかすかな隆起線を有する。尾節板は中央でわずかに中高となり密に点刻される。前脛節は細長く2外歯を有する。体長：9~10 mm。分布：奄美大島。

本種は、前述の *A. bicavata*, *A. ishiharai* および *A. major* などと外部形態が極めて似ているほか、雄交尾器も非常に似ている。しかも、現在までに知られている分布地はいずれも。重複していないことなどから見ても恐らくは、起源を同じくした種類が、それぞれの地域に於いて特殊化していったものであろうと想像される。

わが国には、以上にあげた種類のほかに LEWIS が1895年に記載した(産地に日本と書かれているだけで詳しい模式産地は記されていない)種 *A. nipponica* が記録としては残っている。しかしながら、この種は今までに台湾では分布が確認されてはいるものの、残念ながら著者は国内で採集された個体を実際に検したことはない。本種はわが国に産するかどうか不明であり、その分布には疑問が残る種である。(東京都練馬区)

○日野春のオオヒラタトックリゴミムシ

本邦産トックリゴミムシ族中の最大種オオヒラタトックリゴミムシ *Oodes (Brachyodes) virens* WIEDEMANN は、本州、四国、九州に産し、国外では、中国、東南アジア、印度と分布も広いが、一般には得難い種なのか各地のリストにもあまり見かけないものなので、筆者が石塚勝巳、立石庸一両氏と、日野春を訪ねた際に得たものを報告しておく。

3 早♀, 山梨県日野春, 30. vi. 1979.

雑木林の中に設置した夜間採集の蛍火燈に飛来した。この種に相応しい環境とは思えぬが、遠からぬ所に水田があり、多数のヒメガムシ、コンマゲンゴロウ等も飛来したので、そちらから来たものと思われる。なお、当夜秘かに希っていた雄大なオオクワガタ1♂が、クスギ樹幹に塗布した糖蜜に来ていた。(千葉県船橋市、笠原須磨生)

○茨城県南部のタママシ(その2)

筆者はさきに、茨城県南部(取手市、土浦市、筑波山)に産するタママシ科 Buprestidae として26種を報告した(甲虫ニュース, No. 44)。その後、同地域において下記の7種を得たので、茨城県産タママシに関する資料として追加報告する。

1. ヒメヒラタタママシ *Anthaxia proteus* SAUNDERS

多数, 土浦市実塚, 30. v. 1979: 多数, 牛久町成井, 8. vi. 1979.

2. シロオビナカボソタママシ *Coraebus quadriundulatus* MOTSCHULSKY

4♂♂, 5♀♀, 筑波山御幸ヶ原, 19. v. 1979.

3. クワナガタママシ *Agrius komareki* OBENBERGER

2頭, 土浦市実塚, 10~18. v. 1979; 多数, 筑波大学周辺(桜村), 12. v. 1979.

4. シラケナガタママシ *Agrius pilosovittatus* SAUNDERS

14頭, 土浦市実塚, 10~18. v. 1979; 3頭, 筑波大学校内, 12. v. 1979.

5. ヤナギチビタママシ *Trachys minuta* LINNÉ  
多数, 筑波山神社周辺, 9. ix. 1979; 5頭, 土浦市実塚, 24. ix. 1979.

6. ソーンダースチビタママシ *Trachys saundersi* LEWIS

1頭, 筑波大学校内, 12. v. 1979; 6頭, 土浦市実塚, 24. ix. 1979.

7. ヒラタチビタママシ *Habroloma elegantulum* SAUNDERS

8頭, 土浦市実塚, 28. ix~10. x. 1979.

最後に、種の同定と種々のご教示をいただいた黒沢良彦博士に深謝する。(茨城県稲敷郡、大桃定洋)

○富士山麓のムネアカセンチコガネ

上野俊一博士が静岡県裾野市十里木で採集されたムネアカセンチコガネ *Bolbocerosoma nigroplagiatum* (WATERHOUSE, 1875) (1♂, 21. vii. 1979) は関東地方や東北地方に多い前胸背の黒紋がほとんど消失した型 *f. niijimai* NAKANE, 1952 ではなく、前胸背に大きな黒紋があり頭部も黒い基本型であった。この型は関西地方を中心とした西日本に多いものであるが、その東限がどのあたりにあるかは知らない。今回の標本によって、富士山の南麓にも確実に産することが判ったわけである。なお、十里木は標高約900mで、富士山と愛鷹山にはさまれた鞍部にある。(国立科学博物館、黒沢良彦)

## 福井県のシデムシ

齋藤昌弘

この記録は、福井市立郷土自然科学博物館発行の「福井県博物同好会会報」で発表する為に執筆したものであるが、地方誌であるので、県外の一般人では入手しにくいと思い、ここで少々加筆して発表したいと思う。

なお、特筆しない限り資料は筆者採集保存で、同定も筆者自身が行なったが、特にホソヒラタ・ツノグロモン・ヒロオビモン・ヒメモンシデムシ、及び「原色福井県昆虫図譜」にあるシデムシ科全種(福井大学所蔵)は福井大学の佐々治寛之先生に確認していただいた。又、記録の採集地名はすべて福井県内なので福井県を省略してある。

本文に先立ち、本発表の折に多忙なところ標本の確認及び御指導下さった福井大学の佐々治寛之先生、標本を検査する機会を与えて下さった博物館の長田勝氏に心から深く御礼申し上げる。

福井県のシデムシ科については、既に井崎市左衛門氏が「福井県博物同好会会報」に7種を記録している(1950年)。又、「原色福井県昆虫図譜」(以下図譜と略す)に10種が図示されているが(1938年)、ここで改めて最近の数種の記録を加え、現在までに知られている種を記す。

## シデムシ科 Silphidae

1. キイロツヤシデムシ *Camioleum loripes* LEWIS

低山地～山地で時折採集される。花等のピーティングで得られる。

1頭、大野郡上打波鳩ヶ湯, 4. vi. 1977; 1頭、大野郡上小池刈込池, 17. vi. 1979.

2. オサンシデムシ *Pelatinus striatipennis* LEWIS

低山地～山地に普通で、花上で得られ、冬期には朽木中や樹皮下で越冬するものが得られる。

1頭、南条郡今庄町夜叉ヶ池, 20. xi. 1977; 1頭、勝山市平泉寺三頭山, 29. v. 1977; 1頭、大野郡上小池刈込池, 3. vi. 1979.

3. クロシデムシ *Nicrophorus concolor* KRAATZ

低山地～山地に普通。死体で得るよりむしろオサムシ等と共によどぶ溝に落ちているものを拾う機会が多い。

3頭、坂井郡三国町松島, 1. xi. 1976.

4. マエモンシデムシ *N. maculifrons* KRAATZ

県内での明確な記録はあまりない。確実な標本を検査することができたので以下に記録を示すが、図譜では分布を県下一円としている。

1頭、敦賀市池ノ内, 19. vii. 1975. (長田勝氏採集保存)

5. ヨツボシモンシデムシ *N. quadripunctatus* KRAATZ

県産シデムシのうち、最も多い種の1つで、平地～山地に広く分布する。ヘビ等の死体の他に人糞に

も来集する。

1頭、坂井郡丸岡町豊原, 3. viii. 1973; 1頭、大野郡打波三ノ峰, 23. vii. 1976.

6. ヒロオビモンシデムシ *N. investigator* ZETTERSTEDT

高地性で、筆者が以下の記録で本県初としたもの。同山系の加賀白山には本種の記録がないが、当然分布してよいものと思う。

1頭、大野郡打波、三ノ峰黒ん坊平, 標高約2100m, 7. viii. 1978.

7. ヤマトモンシデムシ *N. japonicus* HAROLD

個体数はあまり多くない様である。図譜の39. シデムシは本種である。

1頭、坂井郡坂井町今井, 13. vii. 1977.

8. ツノグロモンシデムシ *N. vespilloides* HERBST

高地性で、筆者が以下の記録で本県初としたもの。体長差が大きい。分布の西限かもしれない。これも加賀白山に記録がない。

1頭、大野郡打波、三ノ峰黒ん坊平, 標高約2100m, 19. vii. 1977; 3頭、同所, 7. viii. 1978.

9. ヒメモンシデムシ *N. montivagus* LEWIS

高地性で、目下県内では2頭の記録があるのみで、1頭は筆者の記録でもう1頭は佐々治先生の赤兎山での記録である。

1頭、大野郡打波、三ノ峰黒ん坊平, 標高約2100m, 7. viii. 1978.

10. コクロシデムシ *Ptomascopus morio* KRAATZ

平地～山地に普通で、死体の他灯火にも来集する。地域的変化がある様で、平地産では大型で上唇が全く黒色であり、山地産のものでは別種と思われるほど小型で上唇が黄褐色である。両者の中間型も山のふもとで得られ、上唇が半分黄褐色である。

2頭、和泉村朝日前坂, 30. vii. 1976; 1頭、坂井郡丸岡町豊原, 5. ix. 1971.

11. オオモモトシデムシ *Necrodes asiaticus* PORTEVIN

山地に普通で、灯火に来るものを得ることが多い。

2頭、大野郡打波鳩ヶ湯, 30. vii. 1978; 1頭、同所, 18. viii. 1975.

12. モモトシデムシ *Ne. nigricornis* HAROLD

平地～低山地に分布し、県内では最も多い種の1つ。山地では前種と入れ替るようである。

1頭、坂井郡坂井町今井, 1. viii. 1973.; 1頭、福井市足羽山, 10. viii. 1976.

13. ベッコウヒラタンシデムシ *Calosilpha brunnicollis* KRAATZ

平地～低山地に分布し、次種よりやや少ない。

3頭、坂井郡丸岡町山竹田文鏡山, 20. vi. 1975; 1頭、坂井郡金津町宮谷, 19. vi. 1977.



14. オオヒラタンデムシ *Eusilpha Japonica*  
MOTSCHULSKY

平地～山地に分布し、県内では最も多い種の1つ。  
図譜の35. ホソヒラタンデムシは本種である。

1頭, 坂井郡三国町松島, 9. vii. 1977; 1頭,  
福井市川西区布施田, 2. iv. 1973.

15. ホソヒラタンデムシ *Silpha longicornis* POR-  
TEVIN

高地性で、以下の記録で筆者が本県初としたもの。  
地方的変化があり、本個体は前胸背がやや幅広く、  
黒味が強く一見ヒラタンデムシに似ている。西限か  
もしれない。

1頭, 大野郡打波, 三ノ峰黒ん坊平, 標高約2000  
m, 19. vii. 1977.

16. ビロウドヒラタンデムシ *Oiceoptoma thora-*  
*cica* LINNÉ

高地性で、以下の記録で筆者が本県初としたもの。  
個体数はあまり多くない。西限かもしれない。

2頭, 大野郡打波三ノ峰黒ん坊平, 標高約2100m,  
19. vii. 1977; 3頭, 同所, 7. viii. 1978.

17. クロボンヒラタンデムシ *Oiceoptoma nigro-*  
*punctata* LEWIS

山地で時折得られるが、残念ながら筆者の記録は  
ない。図譜のヨツボンヒラタンデムシは本種である。

18. ヒメヒラタンデムシ *Thanatophilus auri-*  
*pilosus* PORTEVIN

最近の記録はないようで、図譜の標本があるのみ。  
図譜では分布地に北潟と敦賀を挙げている。

その他、近縁グループとしてチビンデムシ科では  
次の3種の記録がある。

- ヒレルチビンデムシ *Catops hilleri* KRAATZ
  - アカアシチビタマムシ *C. angustipes* PIC
  - ルイスチビンデムシ *C. angustitarsis* REITTER
- 又、現在はハネカクシ科に移されているが、注目

○対馬と隠岐の甲虫数種の記録

対馬と隠岐で私が採集した甲虫類の中から興味ある  
数種を選び記録しておく。

センチコガネ *Geotrupes laevistriatus* MOTS-  
CHULSKY, 1857 1♂, 対馬下島権現山, 8. vii. 1973.

ヨツバコガネ *Parastasia ferriei quadridentat-*  
*us* (SAWADA, 1938) 1♂, 対馬上島念仏坂, 27.  
vii. 1973.

ミヤマクワガタ *Lucanus maculifemoratus*  
MOTSCHULSKY, f. *maculifemoratus* MOTSCHUL-  
SKY, s. str.

2♂♂, 2♀♀, 隠岐島後大満寺山, 7. vii. 1975.  
雄はどちらも本州の山地に多い基本型であった。

ムツボンタマムシ *Chrysobothris succedanea*  
E. SAUNDERS, 1873

1♀, 隠岐島後横尾山, 10. vii. 1975.

ヒメヒラタタマムシ *Anthaxia proteus* E. SAUN-  
DERS, 1873

2♂♂, 6♀♀, 隠岐島後都万, 9. vii. 1975.

できるものとして次の記録がある。

クロモンデムシモドキ *Trigonoderma lebi-*  
*oides* KRAATZ

1頭, 大野市宝慶寺, 27. xi. 1977.

他に佐々治先生が大野郡下打波で採集されている。

以上が1979年6月現在までにわかっている福井県  
産シデムシのファウナであるが、本県ではオサムシ  
用トラップ以外はほとんど掛けられておらず、ど  
のような種、個体数が分布しているのかは断片的にし  
かわからない。これから記録が増えるとすれば小型  
種で1種、モンシデムシ類で1種、ヒラタンデムシ  
で2～3種ほどであろう。他県との比較もしなければ  
ならないが、本県の上記18種は他県に比べて多い種  
数だと思う。しかし、石川県には本県に記録のない  
ムナグロツヤシデムシが加賀白山で採集されており、  
この種が本県側でも分布しているかどうかは調べる  
必要がある。以上、簡単ではあるが福井県に産する  
シデムシの知見をまとめてみた。

福井県産シデムシに関する文献

- 1) 井崎市左衛門(1956)一福井県の甲虫(1)一福  
井県博物同好会会報第3号, 7種。
- 2) 斎藤昌弘(1978)一福井県の珍らしい甲虫の記  
録一昆虫と自然 vol. 13 (12), 2種。
- 3) 斎藤昌弘(1979)一福井県の珍らしい甲虫の記  
録二一昆虫と自然 vol. 14 (8), 1種。
- 4) 佐々治寛之(1976)一表2-2重点調査地域昆  
虫目録B甲虫類一福井県自然環境保全基礎調査報  
告書 p.173, 7種。
- 5) 佐々治寛之(1976)一甲虫目 COLEOPTERA  
一福井県雄島の昆虫相, 福井大学教育学部紀要第  
II部(自然科学)第26号 p.52, 2種。
- 6) 原色福井県昆虫図譜(1938), 10種  
(福井県坂井郡)

クロナガタマムシ *Agrilus cyaneoniger* E.  
SAUNDERS, 1873

2♀♀, 隠岐島後横尾山, 10. vii. 1975.

共に東北地方や中部山地に多い、頭胸部が赤味を  
帯び、翅鞘がやや緑がかった唐金色を帯びる f.  
*cupreoviridis* LEWIS, 1892であった。

(仙台市, 渡辺 徳)

シラホシナガタマムシ東北の記録

シラホシナガタマムシ *Agrilus alazon* LEWIS  
は黒沢良彦氏の日本産タマムシ科概説10(甲虫ニュ  
ース, Nos. 17/18, 1974, p. 2)と原色昆虫大図  
鑑II(北隆館)によれば、その分布地は関東以西が  
知られている。しかし、筆者は東北地方の南部から  
本種を得ているので報告する。

1♂, 福島県南会津郡館岩村新田原, 1. viii. 1979,  
筆者採集。

この個体は鱒沢入口付近の道端にて、風に流して  
いたネットに止まったものを採集した。

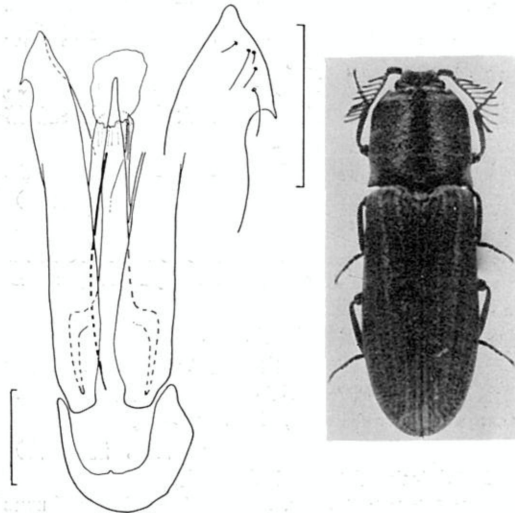
(東京都世田谷区, 服部守春)

○台湾のコメツキムシ覚え書き(1)アカサビコメツキについて

アカサビコメツキは Tonkin から採集された雌個体に基づいて1908年に FLEUTIAUX が *Adelocera sanguinea* と名付けた種である。その後同氏は本種を *Lacon* 属の *Sulcilacon* 亜属に移し、1941年にこの亜属を属に昇格している。しかしながら HAYEK(1973) は *Sulcilacon* 属は *Lacon* 属のシノニムであるとして本種を再び *Lacon* 属に移すと共にこの種名は先に CANDÉZE によって記載された *Lacon sanguineus* の二次新参ホモニムであることを述べ、本種に対して *Lacon mausoni* と新名を与えている。

本種は体の背面があざやかな赤色密毛で被われており、サビキコリの仲間でも最も美しいコメツキムシの1つである。体の背面が赤色であるという点では、タイワンキバネサビキコリ *Agrypnus agillaceus shirozui* (OHIRA) に類似するが、背面の毛はよりあざやかな赤色(生存時)であること、前胸背板は両側が平行状で中央に黒色毛による縦線があること、小楯板はほぼ垂直に位置すること、そして触角は第3節からくしひげ状を呈することによって区別することが出来る。

大平(1968)は台湾の台中で1964年6月10日に採集された1雌を台湾から初めて記録しているが、めずらしい種類なのか、さやばね No. 2: 2, fig. 10



に産地不明のものが図示されている以外にその後の記録はないようである。筆者は幸いにも台湾からいままでも未知であった本種の雄を検査することが出来たので、ここに記録すると共に、雄交尾器の形態図と成虫背面図を併せて紹介しておきたい。(紹介した成虫の体長はおよそ 18mm で雄交尾器のスケールは 0.5mm である)。

1雄, 12, v. 1977, 南投県南山溪, 伊藤 淳採集;  
1雄, 15. iii. 1979, 同上, 篠原明彦採集。

末筆ながら美麗でめずらしい本種を採集されご患与下さった篠原明彦・伊藤 淳両氏に心よりお礼申し上げる。(東京農大, 鈴木 互)

○オオクワガタ生存の記録

1976年7月28日, 新潟県糸魚川市姫川温泉の街燈に飛来したオオクワガタ *Dorcus hopei* ♂を採集, 東京に持ち帰って飼育した。30×16.5×20cm のプラスチック製水槽に市販のカプトムシ飼育用の粉末を入れ, 2~3本の木の枯枝をのせ, 常に多少の湿度を保つよう気をつけた。餌は数日おきに蜂蜜を少量, たまに果実を与えたが, 忘れることも多く, 全体として与えた餌の量は多くなかったと思う。飽食させないことがよかったのか, 一生独身を通じたためか案外長生きし, 1979年4月20日死亡するまで足かけ4年, 2年9ヶ月間生存したことになる。

冬期には水槽の下を毛布でくるみ室内においたが, 今年の異常な暖冬のためと, 転居して室内温度があまり下らない室においたせいか3月ごろから活動を始め, その後の気温の低下, 食餌のとりすぎ(果実を主に与えたなどのため死期を早めたのではないかと思う。ただ生かしていただけで, 自然状態ともかなり条件がちがうとは思いますが, 成虫で4年目を迎えたわけで, 生存の一つの記感として報告しておく。なお, 飼育箱中には常にコクワガタ♀数頭が同居していたが別にトラブルは起らなかった。

(国立科学博物館, 藤山家徳)

甲虫談話会

会費(一カ年)1500円, 次号は3月30日発行予定,  
投稿〆切は2月28日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話(364) 2311 振替東京60664

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお, 有頭針00, 0号もできました。その他, 採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製  
インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都  
内及第一地帯: 3個以下 ¥1,400, 4個以上 ¥850  
(以下同様), 第2地帯 ¥1,400, ¥950, 第3地帯  
¥1,600, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作  
販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479